

東京大学 グレーター東大塾 平成27年度秋期受講生募集要項

1. 塾生対象者

本テーマに関連する専門領域を有する法人派遣者及び本テーマに関心の強い個人

2. 定員：30名

3. 参加費：20万円（税込）

4. 選考方法

書類審査によって入塾を決定します。応募者多数の場合は専門分野のバランスを考慮し、事務局で選考いたします。入塾をお断りすることもありますので、ご了承ください。

5. 出願方法と出願期間

- (1) 出願方法 参加申し込みは次のウェブサイトより申込書をダウンロードして、必要事項をご記入の上、メールにてお送りください。http://www.todai-alumni.jp/program/gtc/index.html
 (2) 締切日 2015年7月31日（金）（応募状況によっては締切りを早める場合があります。）

6. 審査・選考結果発表

- 書類審査の結果は、2015年8月4日（火）までにメールにて通知いたします。
- 選考結果通知後に参加を辞退する場合は、速やかに申し出てください。

7. 開講式、修了証書授与式

当塾は開講式（9/9）と修了証書授与式（12/2）を行います。時間は18：30開始、場所は改めてご案内します。

8. 参加費の納付

受講が確定した塾生に、参加費納付関連の書類、請求書を郵送いたしますので請求書に記載の期限までに納付願います。

9. 個人情報の取り扱い及び注意事項

- 提出された書類は、いかなる事情があっても返却には応じられません。
- 出願により知り得た氏名、住所、その他個人情報については、参加者選考、選考結果発表、入塾手続き業務を行うために利用します。また、同個人情報は、入塾者の教務関係や受講料徴収に関わる業務を行うために利用します。上記各種業務は、一部を本学より受託業者に委託して行うことがあり、受託業者に対して、委託した業務を遂行するために必要となる限度で、知り得た個人情報の全部又は一部を提供する場合があります。
- 講義録を取りまとめて出版する場合があります。
- 本募集要項の記載内容は変更される場合があります。

お問合せ、お申込先

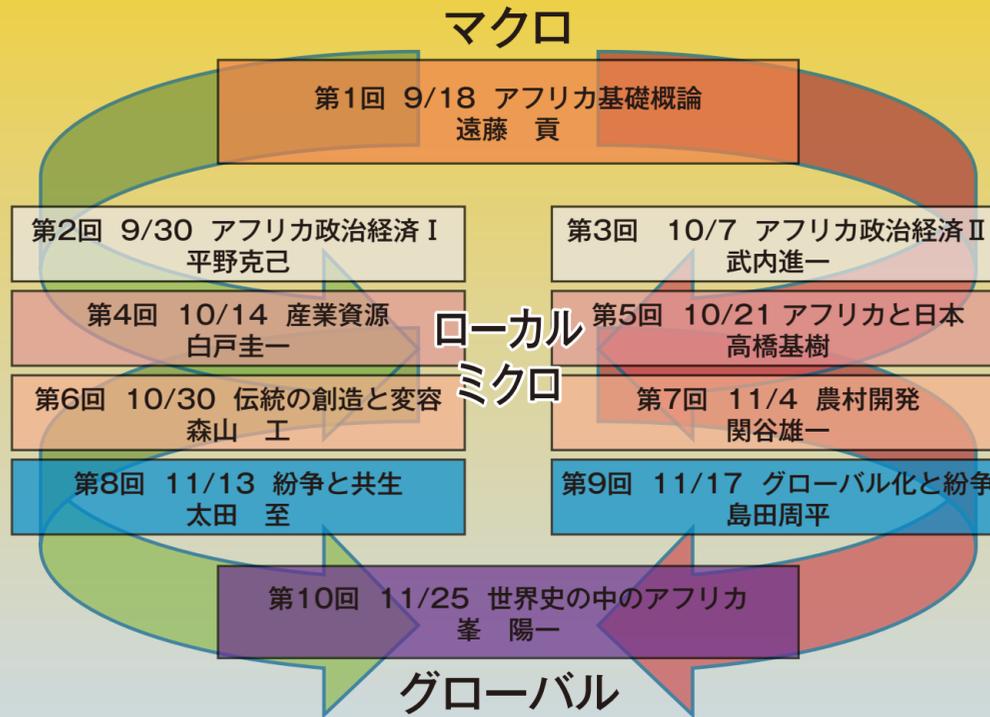
東京大学卒業生室内・グレーター東大塾事務局 プログラムオフィサー：岡崎 洋士／綿貫 敏行／三島 龍
 〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1
 TEL：03-5841-1210 FAX：03-5841-1054 E-mail：juku@todai-alumni.jp

参加塾生総数
240名

開催実績	講座名	塾長
4	H24年秋 「アジアの新しい形を構想する」	東京大学大学院総合文化研究科教授 古田 元夫
5	H25年春 「社会資本のエイジングに対応するロボット技術」	東京大学IRT研究機構教授 下山 勲
6	H25年秋 「中進国時代の中国を読み解く」	東京大学大学院法学政治学研究所教授 高原 明生
7	H26年春 「超高齢社会日本を支える医療技術と社会システム」	東京大学大学院工学系研究科マテリアル工学専攻教授 片岡 一則 東京大学大学院薬学系研究科 ファーマコビジネス・イノベーション教室特任教授 木村 廣道
8	H26年秋 「ロシアはどこへ行くのか～共生の道をさぐる」	東京大学名誉教授 塩川 伸明
9	H27年春 「持続可能な社会のための水システムイノベーション」	東京大学大学院工学系研究科教授 古米 弘明

（塾長の肩書は開催当時）

飛躍するアフリカと新たなる視座



平成27年度秋期受講生募集

グレーター東大塾

10

テーマ 『飛躍するアフリカと
新たなる視座』

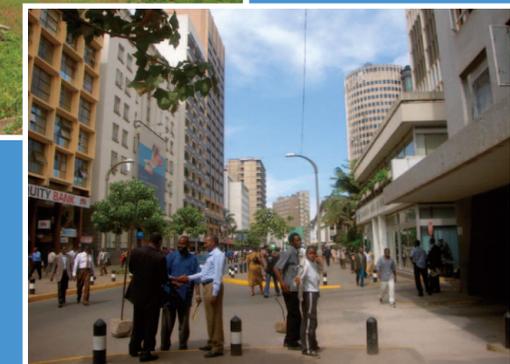
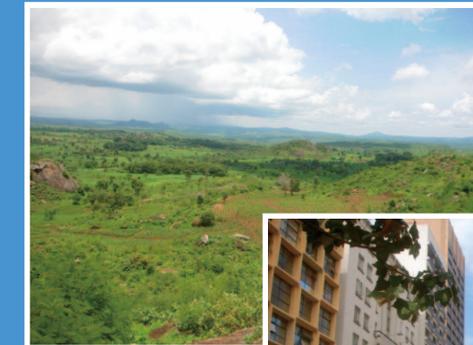
会場／東京大学本郷キャンパス伊藤国際学術研究センター

塾長：
東京大学大学院総合文化研究科 教授
遠藤 貢

アフリカ

グレーター東大塾

グレーターとは、在学教育を拡大して卒業生や社会人を対象とすることから名付けています。先端専門性の高いテーマをピックアップして、課題に精通する第一線教授陣を長とする、「塾」形式で開講します。



IAGS
アフリカ地域研究センター

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO
卒業生室
社会連携部

ご挨拶



大和 裕幸 (東京大学 理事・副学長)

グレーター東大塾は、先端専門性に焦点を置き、現実社会の身近なテーマを取り上げて、塾長となる教授の指導のもとに展開するユニークなものです。一般教養の講義というレベルを超えて、大学と社会が連携して第一線の課題に取り組み、問題解決のネットワークを構築する、それが本プログラムの目的です。

グレーター東大塾の概要

監修

グレーター東大塾企画委員会 委員長 家 泰弘 (東京大学 教授)

場 所 東京大学本郷キャンパス内
時 間 平日夜、18時半～21時
期 間 半期、10コマ
規 模 クラス30名程度
参加費 20～30万円前後(プログラムにより異なる)

- 特 色**
- 先端・専門性の高い現代社会的テーマ
 - 塾長の個性を尊重した多種多様なプログラム
 - 外部講師も含めた実践的内容
 - 受講生参加による共同研究・政策提言なども視野



塾長 遠藤 貢 教授

〈プロフィール〉
 1993年英国・ヨーク大学大学院博士課程(南部アフリカ研究)修了(1997年DPhil取得)。1993年東京大学教養学部社会科学科助手、1998年東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻助教授を経て、2007年より同教授。2010年より東京大学大学院総合文化研究科付属グローバル地域機構(IGS)のアフリカ地域研究センター長。また、2004年に発足した大学院教育の「人間の安全保障」プログラム事務局長。学会活動：日本国際政治学会、日本比較政治学会、日本アフリカ学会で理事。現在、アフリカにおける民主化や紛争に伴う形で出現したソマリアを中心とした「崩壊国家」をめぐる諸問題を中心に研究。『崩壊国家と国際安全保障』(有斐閣、2015年)を出版予定。



副塾長 関谷 雄一 准教授

〈プロフィール〉
 2000年東京大学大学院総合文化研究科博士課程中途退学(2004年博士[学術]取得)。2000年早稲田大学アジア太平洋研究センター助手、2003年より青山学院女子短期大学講師。同短期大学助教授・准教授を経て、2011年より東京大学大学院総合文化研究科准教授。学内では大学院教育の「人間の安全保障」プログラムの運営委員も務めている。学会活動：日本アフリカ学会、日本文化人類学会、国際開発学会、Society for Applied Anthropology等の会員。早稲田文化人類学会においては理事を務める。現在、アフリカ農村開発及び社会変容の研究並びに、国内の公共人類学的研究の一環として、福島原発事故関連の調査も遂行中。『(仮)アフリカから学ぶ文化人類学』(春風社、2015年)を出版予定。

飛躍するアフリカと 新たな視座

塾長：東京大学大学院総合文化研究科 教授
遠藤 貢

本プログラムでは、グローバル化した今日の中で経済活動を中心に飛躍するアフリカの政治、社会、文化、外交、地誌について、日本における最新の研究成果に基づき俯瞰し学術だけではなくむしろ実践社会の中で知識を活用できるような学びを提供する場を想定しております。

基礎論として、まずはマクロな歴史の中に現在のアフリカの諸相を位置づけ、主要な論点を見出そうとすることから始めます。経済的にはグローバルな資源獲得の動きに押され、低迷期から急成長期への上がりながらも今後の動向が揺らいでいる現状を見据える視座をご紹介します。そして、「援助対象地」から「ビジネス・パートナー」へ変貌したアフリカのビジネスを実践現場のダイナミズムから見つめると、どのようなことが分かるかについても議論します。

再びマクロ的に19世紀末以降という長期的視座から政治経済をとらえなおす作業を試みる講座も用意されております。また、日本の開発援助を通してアフリカと日本のかかわりの新しい展開を踏まえ、将来に向けてどのような援助を展開し、どのような関係を築いていくべきかを考える講義がそれに続きます。

一方、ミクロなポイントに軸足を置く諸研究も紹介されます。たとえばマダガスカルの一農村に軸足を置いたローカルな視座から伝統の創造というマクロな営為を見つめる作業。伝統農業の維持を強いられつつも、グローバル経済の波に乗ろうとする農民の生計戦略を具体的な諸事例を踏まえて考察する作業です。

紛争によって解体・疲弊した社会秩序をいかにして修復・再生させるかというアフリカ諸社会が向き合う課題を考えたつ人類社会の在り方を見据える視座も紹介されます。加えて、一国内の違う地域で見られた2つの紛争を取り上げながら、アフリカの地域紛争にみられるグローバル化と地域性の関係性について考える授業も予定しています。

最後に、およそ2千年のタイムスケールでアフリカと外的世界の歴史的交流を跡づけた後で、現代アフリカの国際関係を新たな移民たちの交流に焦点を当てて考察する新しい視座へもご案内します。このように、本プログラムでは、気鋭のアフリカニスト達が開拓している新たな地域研究の視座と可能性を紹介していきます。

平成27年度秋期 グレーター東大塾 講座予定

開催日	講座名・内容	講師
9月18日(金)	第1回 変容するアフリカをとらえる新たな視座への誘い アフリカはきわめて多様な世界である。アフリカ諸国の政治独立の象徴とされるアフリカの年1960年から55年を経過し、多様なアフリカのイメージはさらに新たな想像力の下にとらえる必要がある地域という位置づけを与えることが可能である。本講義では、改めてマクロな歴史の中に現在のアフリカの諸相を位置づける作業を行い、その来し方行く末をとらえる上で必要な論点をできるだけ包括的に提示することを目的とする。貧困と成長、紛争と安定、といった極めて現代的な対立図式でも語ることは可能であるが、こうした変容の中に見いだす必要がある問題点について改めて諸論点を提示すると同時に、グローバル化の中のアフリカがいかに現代世界と深く結びついているかに関する見取り図を改めて示しながら、以後に行われる諸講義の導入の役割を果たすこととする。	東京大学大学院 総合文化研究科 教授 遠藤 貢
9月30日(水)	第2回 グローバル化されるアフリカをどう理解すればよいか ながて低迷していたアフリカ経済は2003年の資源高以降一転して急速な成長軌道に乗った。世界がアフリカを必要とするようになり、ようやくグローバル化の波がやってきて、それが経済成長となつて現れたのである。いまのアフリカは20世紀のアフリカとは異なる構図のなかにあり、異なるダイナミズムをもっている。それを把握するには、したがって前世紀のアフリカ観ではダメなのである。資源価格が急落し始めた現在、いったいアフリカはどこに向かうのか。「新たな視座」を総論する。	日本貿易振興機構 アジア経済研究所 地域研究センター・ 上席主任調査研究員 平野 克己
10月7日(水)	第3回 長期的視点でアフリカを見る アフリカに対しては悲観論、楽観論が入り交じるが、冷静な議論のためにアフリカの経験を長期的視座から捉えることが重要である。本講義では、19世紀末以降アフリカの歩みを、ヨーロッパによる植民地化、独立、長期的な経済停滞、冷戦後の民主化、急速な経済成長といった形で時代を画する動きとともに跡づけるとともに、今後を展望したい。50カ国以上の主権国家が集まる大陸でありながら、アフリカでは、かなりの程度政治経済の共振性が観察される。多くの国が同時に、よく似た政治経済上の経験を積み重ねてきたのである。ただし、冷戦終結以降、アフリカ諸国の政治経済的な分화가目立つようになっている。本講義では、近年の動向も加味しつつ、アフリカの来し方行く末を検討、考察する。	日本貿易振興機構 アジア経済研究所 地域研究センター長 武内 進一

開催日	講座名・内容	講師
10月14日(水)	第4回 産業資源(ビジネス) 過去十数年間に本格化した経済成長により、国際社会におけるアフリカの位置付けは、かつての「援助対象地」から「ビジネス・パートナー」へと大きく変貌した。今や資源企業のみならず、世界の様々な業種の企業がアフリカへの投資や販路開拓等に関心を示している。本講座ではまず、こうした現実を踏まえ、なおかつ新聞社の元アフリカ特派員であり現在は商社系シンクタンクの研究者である講師のキャリアを生かし、アフリカにおける企業活動の実態について、豊富な事例を紹介しながら、その特質を明らかにしていきたい。そのうえで、アフリカでビジネスを展開する企業が直面する課題、問題への対処法、アフリカ社会へのインパクト等について考察を深める。最終的には、進出する企業とアフリカの人々の双方に裨益するビジネスの在り方と、それを実現可能にするための政治・社会環境はいかなるものかを探ることが、本講義の狙いである。	三井物産戦略研究所 主席研究員・ 京都大学大学院 客員准教授 白戸 圭一
10月21日(水)	第5回 アフリカと日本のかかわり：そのあり方と新しい展開 アフリカ経済の成長や社会の変化につれて、アフリカと日本のかかわりも大きく変わっている。日本にとって、アフリカは植民地時代以来工業製品の輸出先であり、天然資源・一次産品の輸入先であったが、その貿易額はきわめて小さく、日本からの投資も限られ、民間の経済関係は全体として疎遠だったと言えるだろう。むしろ、打ち続くアフリカの苦境のために開発援助が大きな位置を占めていた。そうしたなかでも、人の往来や文化的交流はゆっくりと拡大し、お互いの認識を変えてきた。近年、日本の世界経済における役割の変質、またアフリカの経済成長に応じて、貿易や投資が拡大し、質的变化を遂げつつある。さらに開発援助も新しいかたちに移行しつつある。この講義では、アフリカと日本のかかわりの新しい展開を踏まえ、将来に向けてどのような援助を展開し、どのような関係を築いていくべきかを考えていきたい。	神戸大学大学院 国際協力研究科 教授 高橋 基樹
10月30日(金)	第6回 アフリカにおける「伝統」の創造と変容：マダガスカル近現代史から 「伝統」といわれるものが、太古から連続として受け継がれてきた不変で固定的なものではなく、場合によっては意外にも現代に近い時代に起源をもつものであることを、歴史学や人類学の諸研究は明らかにしてきた。本講義では、旧フランス植民地のマダガスカルをフィールドに設定しながら、現代のある農村地域において行われている葬送儀礼を取り上げて、その「伝統」としてのあり方を具体的に考察する。それを通じて、あるローカルな儀礼的实践がマダガスカル他地域との連関にあり、さらには19世紀に端を発するマダガスカルの植民地化というグローバルな動きに捕捉されていることを明らかにする。これは、「地域」を閉じた決定性において構想するのではなく、一農村地域というきわめてローカルなレベルから、国内他地域との関係のレベルを経て国際的な関係のレベルにいたる、さまざまなレベルにおいて構想する視点につながるものである。	東京大学大学院 総合文化研究科 教授 森山 工
11月4日(水)	第7回 現代アフリカの農村開発 アフリカ大陸諸国にとり主要産業は依然として農業である。農村の発展なくしてアフリカの発展は望めない、といっても過言ではない。しかしながら、グローバル化の波に乗って、アフリカの人々の生計戦略は多様化していることも否定できない。農村に軸足をおきつつも、都市や市場で売れる商品をつくったり、都市へ出稼ぎに行ったりしながら、糧につながる経済活動も行っている。本講義では、現代アフリカ農村の発展についてローカルな人々は何を望んでいるのか、伝統的しがらみを残しながらも、グローバル化が押し寄せる時代にあつて、人々は目指すべき開発や発展の方向性を、伝統農業の維持と、生計戦略の多様化という背景の中でどのように見出すことができるのか、先行研究に基づきながらいくつかの事例を紹介しつつ、聴講者ととも考えてゆきたい。	東京大学大学院 総合文化研究科 准教授 関谷 雄一
11月13日(金)	第8回 アフリカにおける紛争と共生：ローカルな視点から 現代のアフリカ諸社会は、紛争によって解体・疲弊した社会秩序をいかにして修復・再生させるかという課題に直面している。この課題に対して国際社会は、軍事的介入や和平協定の締結・制度構築への協力、司法介入、NPOなどの市民社会からの支援といったかたちで関与してきた。しかし、こうした外部からの介入は、紛争によって傷ついたアフリカ人同士の和解や社会的修復を実現するためには、あまり有効ではない。西欧近代の制度や価値観を導入するのではなく、アフリカ人がみずから創造・蓄積し、運用してきた知識や制度を活用することによって、人びとの和解や社会の修復を実現する道がある。本講義では、この課題を具体的に考えながら、そのことが、現代の私たちが直面するさまざまな困難に対処するための人類社会に共通の財産になることを論ずる。	京都大学 アフリカ地域研究 資料センター 教授 太田 至
11月17日(火)	第9回 アフリカにおけるグローバル化を考える：地域紛争のグローバル化と地域性 今世紀に入りアフリカ各地で地域紛争が頻発している。最近ではイスラーム過激派の武力行使や情報発信が世界を揺るがし、地域紛争がもつグローバル性に注目が集まっている。しかし、地域紛争勃発のきっかけや紛争の長期化・過激化の要因、さらには紛争当事者集団の行動をみると、紛争地域や紛争国がもつ内部的要因の重要性も相変わらぬ高いことが明らかとなつてきている。本報告では、1990年以降ナイジェリアで起きてきた2つの地域紛争(ニジェールデルタの地域紛争とボコハラム運動)を取り上げ、それらがどのようにグローバル性と地域性を織り合わせながら2000年以降過激化してきたのか検討してみたい。2つの地域紛争は、1国内で起きた同時代の紛争であるが、グローバル化の影響の違いや政府の対応の違いが複雑に絡み合い、まったく異なる展開を遂げてきた。グローバル化に反発しつつそれを積極的に利用する過激派集団の戦略にも注意しながら、アフリカの地域紛争にみられるグローバル化と地域性の関係性について考えてみたい。	東京外国語大学 大学院 総合国際学研究院 特任教授 島田 周平
11月25日(水)	第10回 世界史のなかのアフリカ 本講義では、アフリカ世界を周囲の世界との相互関係のなか位置づける。アフリカは概して土地豊富社会であり、人々の移動性の高さによって特徴づけられる。その開放的な移動性の外延に、アフリカ大陸は周囲の世界と活発な相互交渉を続けてきた。東アフリカの環インド洋交易、西アフリカのサハラ縦断交易、アメリカ世界と結びつく大西洋奴隷貿易、欧州諸国による植民地支配から独立を経て、現在のアフリカは、伝統的な「パートナーである欧米諸国に加え、東アジア、南アジア、東南アジア諸国との交流を加速させている。本講義では、およそ2千年のタイムスケールでアフリカと外的世界の歴史的交流を跡づけた後で、現代アフリカの国際関係を新たな移民たちの交流に焦点を当てて解説する。	同志社大学 グローバル スタディーズ研究科 教授 峯 陽一

※講師ならびに講座内容は変更される場合があります。ご了承ください。